シャーレの業務は個人がこなせる量ではない。だが先生と呼ばれる男はときに生徒の支援も借りながらそれを黙々とこなしている。

書類の山に囲まれ、たまにリン行政官から不備についてお説教をされ、生徒の相談やトラブルが頻繁に届く中で、しかし彼は自分の道を歩んでいた。

「まぁ、今日の進捗はこれくらいで良いかな。結構良い時間だし…あー…そっか、そろそろゲヘナ学園は期末テストの時期か」

そう呟いて時計を見ると針が20時半を指していた。彼には普段の業務だけでなく、自らに課した様々なすべきことがあった。

「うーん、それじゃあ夜も頑張るかな」

彼は背もたれに身体を預けて大きく伸びをすると立ち上がり、ジャケットを羽織って夜のD.U.シラトリ区へと向かっていった。

「ンだよ…また先生かよぉ」

夜の路地裏は不良生徒たちのたまり場だ。ゲヘナ学園ならではのいかめしいヘイローが特徴的な少女たちが、イヤそうな視線を向ける。

しかし彼はその程度でへこたれるはずもない。明らかにガラの悪い少女たちがたむろする中へ自ら入っていき一通り笑顔を向けて彼女たちの様子を確認する。

一応みんな怪しげなクスリとかに手を出してたりとか、何か危険なことに巻き込まれた様子はなさそうだ。

まずは一安心、と彼は内心安堵の吐息を漏らす。ならば本題をと彼は切り出した。

「ははは、ごめんね。でもさキミたちもそろそろ期末テストだから…」

「はァ！？ンなことのために来たのかよ！？先生、アタシらが勉強すると思ってんのか？」

「いやでも今度赤点取るとキミたちは…」

「うっせーな！知ったこっちゃねーよ！勉強が怖くてツッパリができるかってんだ！！！」

時間を見つけては不良生徒たちの様子を見に夜回りを繰り返し、今のようなコミュニケーションを繰り返す。

少女たちはすぐには手を出しては来ないが、苛立ちを隠さずにこちらを見つめて来る。

「ンなくだんねーこと話すんならさっさと出てけよ！今度来たら容赦しねぇからな！！！」

「ごめんごめん、また今度ね」
「うるせー！！！二度とくんな！！！！！」
「そうだそうだ！！！」

少女たちの罵声を受けて、とりあえずそれが伝えられただけでも良かったなと自分を納得させ、路地裏から出て来る。
すると、そこには見慣れた少女の姿があった。

「おいこら。何をしている」
「ゲッ、公安局の狂犬」
「やっべ…」
「あ、カンナ」
「先生どうされましたか。こいつらがなにか？」

露骨に警戒心、それ以上におびえを見せるゲヘナの不良生徒たちを視線で制しながらヴァルキューレ警察学校の誇る公安局の『狂犬』、尾刃カンナは先生と不良生徒たちの間に割って入った。

「いや、カンナが心配してくれるようなことは何もないよ」
「本当ですか？先生はこいつらのような手合いを庇い立てすることが多いように思いますが」

「大丈夫、今日はちょっとテストが近いからテスト対策とか受けてみない？って話をしに来ただけだから」
「そ、そうだよ先生、ソイツに言ってやってくれよ！」
「アタイら別に何も悪いことはしてねーよ！」

カンナの身体能力は非常に高い。鍛えられた肉体と高い体術スキルで容疑者を制圧するのはお手の物で、不良生徒たちも自分たちが束になってもかなわないのはイヤというほど理解している。
今もカンナがその鋭い視線を向けるだけで少女たちはビクン、と身をすくませていた。

「……どうやら事実のようですね。分かりました」
「良かった、何か大ごとにならなくて」
「…チッ、しらけちまったな。おい、どっかで仕切りなおそうぜ」
「いいねいいね、それじゃ公園の方でも行くか！」
「ちゃんとお家に帰るんだよー」

うっせー、余計なお世話だ！と返す少女たちの背中を見送って、気が付けばそこにはカンナと先生が二人きりになっていた。

「ご無事でよかった。先生は今日のお仕事はもう終わりですか？」
「うんそうだね、さすがにもう今日はどっかで夕飯食べて帰る感じかな」

互いに普段から忙しくて必要がないと顔を合わせないふたりだ。そもそもヴァルキューレ警察学校は暇だから遊びに来るような場所でもない。
だからこのようなタイミングで出会えることは貴重だし、なればこそそのチャンスを大事にしたいとカンナは思っていた。

「なるほど、私もヴァルキューレに日報を送ったらもう本日の職務は終了です。ですから、例のお店に行きませんか？」
「いいね、たまには行こうか」
「はい是非ご相伴にあずからせてください」

どんな返事がかえってくるか。内心不安だったカンナだったが、先生は笑顔で応じてくれる。
ワクワクする心を抑えて、ふたりは並んで夜の街へと消えていった。

（先ほどのようなこと…それが必要なことなのだろうか？）

カンナは自問自答しながら手にした湯飲みの中身を飲み干す。その飲みっぷりのせいでお酒のように見

えてしまうともっぱらのウワサだが、ただのウーロン茶だ。
屋台の中、狭い椅子に腰かけ、先生と並んで肩を寄せ合って焼き鳥を食す。適度に油の落ちた鶏肉に加えて、炭火の香りが良いアクセント。自慢のタレは甘すぎず、自己主張は弱いものの焼き鳥全体の味をうまくまとめあげている。
この一串、この一杯を楽しめればそれで日々の疲れなぞ吹き飛んでしまいそうだ。

「大将、同じものを……ありがとう」

自分が物思いに耽っているのを察してか、先生は特に話しかけてこない。だから彼女は自問自答を再開する。
カンナは弱い人々を守るためにヴァルキューレを志し、公安局長の地位に上り詰めた。
キヴォトスでは日常的に列車ジャックなどの重犯罪が発生し、公安局の仕事は休まることを知らない。余裕のない予算の中でやりくりをして治安維持任務に就いていると、そのような犯罪行為を繰り返す連中の予備軍でもある不良生徒たちに眼差しはどうしても厳しいものなりやすい。
垣根を越えて人と接し、しなくても良い苦労を重ねる。

「どうしてなのか…」
「うん？」

そう思わず口に出してしまうと、応じる声。
カンナは自分の隣で枝豆を口に運んでいる大人の男性、すなわち先生に視線を返して、少し困ったように視線を泳がして
「あ、いえ…その…なんといえば良いのか…」
「うん」
「先生は、どうしてあのような落ちこぼれたちを助けようと思うのですか？」
「ああさっきの」
「はい。先生に対してあんな態度を取る生徒なら制圧してしまっても良かったのですが」
いやそれをされちゃうと台無しになっちゃうんだけどなと苦笑する、この人の好さそうな男に対してカンナはあくまで組織人だ。学区と学区、エリートと落ちこぼれ、そうした領域をはみ出すようなことはあまりしない。あくまで不良生徒と触れ合うのは捜査というある種の異常事態のみ。
「そうだね…確かにそういう生徒たちを無視したら楽だ。『あんな子たちはこの学び舎に相応しくない』と排除してしまうことはいつだってできる。でもそうしない理由は、公安局にいるカンナが一番わかってるんじゃないかな？」
「そう……ですか？ふむ…」
「カンナは不良生徒を捕まえて取り調べをしたらどうする？」

「しかるべき手続きを踏んで矯正局に送りますが……あ、なるほど」
先生が優しく頷き返す。
「再起のチャンス、矯正のチャンスはある、ということですか」
「そうだね。カンナたちのお世話になる前に、やれることがまだたくさんある」
「なるほど…私たちは、犯罪が起きてからしか動けません。犯罪を軍事的に威圧すること以外で防ぐことができません。しかし先生はその根本を取り除こうとされているのですね」
「そんなに大げさなことじゃないし、私ができることは限られているけどね」
「いえ…ご立派だと思います」

カンナのような立場の人間だからこそ、その困難さは容易に想像がつく。ハリネズミのように心を武装した少女たちは「自分たち」か「それ以外」かで人を選別し、異物に極端な拒否反応を見せる。
捜査においてもそれが大きな障害になることがザラで、だからこそしつこく証言や証拠を集めてまわる彼女は『狂犬』と呼ばれているのだ。
「カンナこそ、そういう中で苦労してるんじゃない？」
「私の苦労など、先生の前でかすむようなものですよ。ひたすらに地道なだけです」
「それができることが凄いんだよ、カンナ」

「そうでしょうか。できることをやっているだけですが」
「そうだよ。だから部下がカンナに全幅の信頼を置いてるんじゃないか」

ふぅ…と声が漏れる。
そのように労われてしまうと、尾刃カンナという鎧を脱ぎたくなってしまう。夜の帳に身をゆだねたくなってしまうのだ。

「先生、そのように優しい言葉をかけないでください。私はそう繰り返されてしまうと、またあなたに甘えたくなってしまう」

この屋台の雰囲気がそうさせるのか。
カンナはまるで酩酊したかのように頬を紅潮させて、先生を見つめた。
その視線を受けた先生は真面目ぶった表情で

「カンナ」
「なんでしょうか」
「実をいうと私はどうやってカンナを誘おうかずっと考えていたんだよ」

「はぁ…んぢゅ…んむ、んんんん…」
「カンナ…ちょっと…んぷぅ…あむっ、うん…」

大して清潔でもないホテルにふたりで入り込み、部屋の扉を閉めた瞬間、カンナは激しく先生の唇を貪った。

「待って、ほら…んむぅ！？あ…んっ…ふぅ…」
「待ち…あむぅぅぅぅ…ぢゅぢゅ、んぅぅぅぅ、ませ、ん…」

壁に押し付けて吐息を漏らしながら、先生に迫る。その勢いですでに服は乱れ始めており、外れたボタンの合間からカンナのブラジャー越しの乳房が見え始めている。

先生はそれでもなんとか部屋の照明を消そうと手を伸ばしたが、それも制止される。

「ぷぁっ……ダメですよ先生。これから私の肉体も恥ずかしいところも、先生の肉体も、恥ずかしいところも全部見せあうのですから」
「ちょっと暗くしてムーディー…とかダメかな？」
「ダメです。私をしっかり目に焼き付けてもらいますし、私にも先生をしっかり見せてください」

言いながらカンナは先生をベッドの縁に座らせると、チャックを下ろさせて先生のペニスを露出させた。

「ああ…まだ半勃ちなのにこんなに大きい。はァ…」

もう我慢できないといった様子で両手で愛おしげにそれをつかむと、よだれを垂らして、亀頭に舌をはわせる。

「ぢゅっぷ…ん、これで、この前も私は…やっぱりすごい…これが大人…れろ、れろ…んっぷ…ん…」

「カンナ…そんな、いきなり…！」

「こんなもの…不法所持ですよ。もっと調べなければ…。クッ、私も内部から熱く…！」

熱に浮かされたようにカンナは胸元をはだけると、その巨大な乳房で先生のペニスを支えながら、しゃぶるのを再開する。

「また大きく…ん、どれだけ大きくなるのですか…硬さも十分ですし…何よりも…熱い…あむ。でも美味しい…！」

「カンナ！ちょっと待って、ストップ！これ以上されると…！！！」

「いいですよ。私のクチにいつでも出して下さい。んちゅ、じゅぷ、じゅぷぅぅぅぅぅっ！！！」

「くぅぅぅっ！！カンナぁ！！」

どぴゅるっ！！！びゅく、びゅくびゅくんっ！！！

一発目の射精は何よりも濃厚だ。それを逃すまいと口をすぼめて飲み干そうとすると一部が口元からあふれ出し、それすらも漏らすまいと指でぬぐうと口に含む。

「ああ…濃くて、美味しいですよ先生…けほっ、私の官能を、高めてくれる…たまりません」

さすがに多すぎたのか一度せき込んでしまうと、先生がカンナの様子を気遣うように覗き込んでくる。

「カンナ…大丈夫かい？」

「先生が心配する必要はありません。私が好き好んでザーメンを飲み干したのです。それよりも、そろそろ次の段階へと進みましょう」

「あ、うん…分かった」

狭い部屋の中に、互いの衣服を脱ぐ音がごそごそと響く。先生はつい気恥ずかしくて目線をあわせないようにしてしまっていたが、

「先生。いかがでしょうか」

そう呼びかけられてカンナの方へと向きなおる。普段ヴァルキューレの制服とジャケットに隠された豊満な肉体が、そこにはあった。
鍛えられた腹筋や背筋と、その上下に実るふたつのたわわな乳房とヒップ。男なら思わずむしゃぶりつきたくなるような魅力にあふれている。

「綺麗だ、カンナ」
「そうはっきり言っていただくとさすがに恥ずかしいですね…」
「でも事実だよ」
「ありがとうございます。先生も素敵ですよ」
「ああいや、カンナと比べてしまうと私なんかは……最低限しか鍛えられてないしね」

カンナのような肉体美には程遠いと少し負い目もある先生だが、カンナはそんな先生の様子を見てクスリと笑う。

「先生は素敵な男性ですよ。私が保証します。だから、私にもっと先生の魅力を教えてください」

言いながらカンナはベッドの上で大股開きになると、そのまま誘うように先生を見つめてきた。

「カンナ」
「はい……」
「君も、もう我慢できないんだね」
「当然です……」

先生の視線の先には愛液をしたたらせた密壺が広がっており、既に先生のモノをしゃぶっているときから準備が完了していることを示していた。

「私を先生のものにしてください、先生」
「ああ」

ゆっくりと、先生はカンナの上に覆いかぶさる。そして、

「行くよ、カンナ」
「はい……」

ずぷ、ずぶぶぶっっっ！！！

「あ、あぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」

ひときわ甲高い声をあげて、カンナは絶頂を迎えた。その膣内からは愛液が大量に噴出し、シーツに大きな染みを作っている。

「か、カンナ！？」
「はぁ……は、あ、んんっ……は、はぃ……大丈夫、です……」
「でも、今……」
「気にしないでください。先生が入って来るのが嬉しくて、それだけでイッてしまっただけですから」

恥ずかしそうに苦笑する。
――そんなに自分は彼女を焦らしてしまっていたのだろうか。ふとそう感じてしまい、先生の中にカンナに対する申し訳なさが湧いてくる。

「ごめんね、そんなに待たせてしまって」
「いえ、そんな…んはぁぁぁ！？」
「だからその分も、サービス、するね…！」
「おほぉぉぉ、そんな、私の乳房をそんなにねぶられてしまうと…んぉぉぉぉぉぉ！」

腰を振りながら、片手で乳首をつまんでこねると、それに合わせて膣壁がきゅんきゅんと締め付けを強く

してくる。

「はぁ、はひぃ！んはぁぁ、んおぉおおお！！おっぱいもおまんこも気持ちよくなってしまいますぅぅぅぅ！」

そう叫びながらカンナの膣は蠕動運動を繰り返す。その収縮が欲するのは当然白濁の奔流だ。

「んはぁぁぁぁぁ、せ、先生、イキます！！私おまんことおっぱいでイカされて…ふぁぁぁぁ！！！！！」

「カンナ、私も……！」

「来て！先生のザーメンでいっぱいにしてください！んん、んあぁぁぁぁぁ！！！イくぅぅぅぅぅーーーーーーーーーーーー！！！！！」

どぴゅるぅぅぅぅっっっ！！！と、大量の精液がカンナの子宮へと注がれていく。それはカンナと先生の情欲の結晶でもあった。

「んっはぁぁぁぁ……すごい……熱いです先生……。こんなにたくさん。ン…でももっと欲しい……」

上目遣いに見つめて来る瞳には恥じらいと、それ以上の愛欲を灯している。

――――カンナとするときはいつもフルマラソンみたいな体力を要求されるなぁ。そう内心苦笑しながら、

しかし大人のプライドに賭けて弱音は吐けない。

「今度はどこに欲しい？」

「それは…私のこの胸の間に…」

両手で双丘を寄せて誘うカンナにうなずきながら、ベッドの上に膝立ちになる

「分かった。じゃあちょっと体重かかっちゃうかもしれないけど上に乗るね」

「大丈夫ですよ、鍛えていますので」

とはいえ女性の柔肌の上に乗って押し付けるようにパイズリをさせるというのは、背徳感があって興奮する。そんなことは口に出せないが、自分の中にある欲望にペニスは忠実なようだ。

「すごい……パイズリする前からもうビンビンに」

「あはは…申し訳ない、ちょっと興奮してるみたいだ」

「光栄です。では…たっぷりパイズリを…」

ぬちゃり、と音をたててカンナの豊満な乳房が先生の肉棒を包み込む。柔らかな谷間に包まれる感覚に、思わず先生の口からため息が漏れた。